

## 忘れ語り、いま語り

## 縄文文化と現代

これもまた、パソコンのなかに残っていた、講演メモのひとつである。縄文文化の残存というテーマに沿って、わたし自身の民俗学者としての調査と知見を重ねながら、手探りに論じようと試みている。やはり、講演メモをそのままに掲載しておきたい。原題はどうやら、「現代に生きる縄文的なるもの」であったようだが、定かではない。

☆

## (1)、縄文文化の残存をめぐる

- ・いまに残る民俗のなかに、はたして縄文文化に繋がるような文化要素を見いだすことは可能か

厚いタブーに包まれた問い、

現代と縄文時代とのあいだに横たわる、古代・中世から近世へとつらなる数千年の時間を無視して、文化の連続性など語ることができるはずはない、

しかし、東北をフィールドにするようになると、

その縄文が思いがけず身近なものに感じられはじめた。

タブーを破らねばならない、という確信に到り着く

- ・名久井文明『樹皮の文化史』

縄文時代の遺物と近代以降の民俗例を丹念に比較・検証

植物性素材の利用や加工技術のうえに、はるかな時間の隔たりをこえて、濃密な連続性が見られる

「植物性素材で製作された民俗例の入れ物の中には縄紋時代の古態を留めるものがある」(『樹皮の文化史』)

→習俗・信仰・世界観については、「縄文文化の残存」はあるか……

## (2)、埋甕と胎盤処理の民俗

- ・たとえば、木下忠『埋甕——古代の出産習俗』

縄文時代の埋甕／胎盤を戸口などに埋める民俗

「縄文文化の残存」の掘り起こしが、

これからの考古学や民俗学にとって重要なテーマになる

- ・埋甕／縄文時代の竪穴住居の入り口の床面下に埋められている

把手がなく縁が平らであり、底部が欠けているものが多い

さまざまな解釈、

近年の発掘調査、胎盤埋納説——縄文時代には、竪穴住居の入り口付近に、出産後の胎盤を納めた甕を埋める習俗が存在した

- ・胎盤処理の民俗、大きく二つの形式

## A、胎盤を家の戸口や敷居の下に埋める形式

踏まれれば踏まれるほど子どもが丈夫に育つ、という信仰

土間の隅・軒下・雨垂れ落ち・便所の踏み板の下、さらに馬屋や牛小屋、辻や分かれ道などに埋める民俗

## B、産室の床下・縁の下に胎盤を埋める形式

「陽光に当たることを忌む」

別棟の産屋をとまなう、浜辺に埋めたり、海に流す民俗

- ・東日本一帯に戸口に埋める形式が多く、西日本の海岸寄りの地方に、床下に埋める形式が分布している

出産や月経のときの別火があり、産屋や月経小屋を持つ、いわば血を忌む民俗の分布地域が、胎盤を床下や浜辺に埋め、また海に流す民俗の分布と重なっている

なぜ、西日本の海岸寄りの地方に色濃く分布しているのか

弥生時代に渡来した農耕＝漁撈民によって持ち込まれた、新しい文化・習俗であった

それ以前の縄文の種族＝文化は、血の忌みをそれほど強くは意識していなかった

縄文時代の竪穴住居の入り口に埋められた埋甕は、たしかに中部・関東を中心とした東日本にもっぱら分布している

血を忌む人々が、竪穴住居の入り口や家の戸口に胎盤を埋めることはありえない

- ・出産や育児にかかわる、「縄文文化の残存」として、

たとえば、赤ん坊の足や手を型押しした足形・手形土製品

新潟・山形・岩手・青森、そして北海道など

成長祝い的一种、ヒモを通すための穴、魔除けのペンダントか

民俗の類似例として

民家の戸口などに貼られた、白紙に小さな手形を押しした痲瘡除けの呪い札

子どもの健やかな成育を願う信仰習俗のひとつ

## (3)、葬送と墓地をめぐる

- ・縄文集落／同心円を基本とした、ある典型的な空間構造が見いだされる

「縄文モデルムラ」(小林達雄)

たとえば岩手県紫波町の西田遺跡

集落の中央に広場、一九二基の墓坑が円形に並んでいる

集落の中央広場／先祖である死者たちの眠る共同墓地

そのまわりを掘立て柱の建物群が取り囲み、

その外縁には竪穴住居群が環状をなして配されている

もっとも外側には貯蔵用の穴が点在している

集落の全体が同心円状に、あきらかなデザインへの意志をもって形作られている

→縄文集落は、死を中心に抱えこんだ円環をもってデザインされていた

縄文文化が死の穢れを忌むことの少ない種族＝文化であった可能性

それは、弥生以降の、墓地を日常の暮らしの場から隔離する空間デザインとは、大きな隔たりを感じさせる

- ・縄文時代の別の墓地の様式

縄文の貝塚／しばしば埋葬された状態の人骨が発見されている

ゴミ棄て場ではなく、アイヌの「送り儀礼」のような場であったか

人間の死者がイルカ・イノシシ・シカなどの獣とともに、「あの世」に送られた

貝塚墓地と呼ばれている、貝塚が住居の近くにあった

竪穴住居のなかに死者を埋葬する廃屋墓

死者が出たとき、それまでの住居を棄てて墓にする

隣接して新しい竪穴住居が造られた

ここでも生者と死者とは隣り合わせに暮らしていた

→貝塚墓地も廃屋墓も、死の穢れを忌むタブーとは無縁な習俗であった

- ・東北の山あいの村々の屋敷墓

屋敷地内にもうけられた先祖代々の墓の跡

下北半島、カグジ墓、庭先に遺体を埋葬する習俗が近年まで残っていた

屋敷墓は、関東・東北の村々や、南九州の山村などに多い

高取正男『神道の成立』／屋敷に近く埋葬地をもうけることは、むしろ由緒ある古い時代からの民俗だった

死の穢れを忌み遠ざける文化は、おそらく弥生以降に広がった

集落の中央広場に共同墓地をいとなむ縄文のムラは、

関東・東北や南九州の屋敷墓を持つ山あいの村々にゆるやかに繋がっている

- ・縄文時代には、早産や死産の赤子や子どもは大人の墓地に埋葬されなかった

子どもの遺骸、穴を掘って、深鉢形の土器に納めて埋められた

埋設土器・埋甕・小児用土器棺など

三内丸山遺跡、埋設土器が約八〇〇基ほど発見されている

民俗社会／子どもと大人の葬法は形式を異にしていた

子墓・子三昧・ワラベ墓など

一般の墓地とはまったく別の場所にもうけている例も見られる

たとえば青森県三戸郡では、七歳以下の子どもが死ぬと、紫色の着物を着せ、干しイワシを一尾くわえさせて葬る習俗があった

「七歳までは神の内」という諺

数えて七歳以前の子ども、人間界よりも神の世界の側に近い存在と観念されていた。縄文時代の大人の墓地から発見される、もっとも若い遺骸は、五歳前後である

似たような子ども観があったのか

## (4)、送りの儀礼と供養の民俗

- ・貝塚や盛り土について

たんなるゴミ棄て場ではなく、なんらかの祭祀や儀礼の行なわれる場であった

三内丸山遺跡の盛り土／ヒスイの大珠・コハク・土偶・小型土器など、祭祀にかかわると想像される遺物が出土している

- ・貝塚／意図をもって並べられたらしい動物の骨が出土する

たとえば、釧路市の東釧路貝塚(縄文前期)

イルカの頭骨が後頭部を中心に、また口先を中心に放射状に並べられていた

海獣の一種、イルカにかかわる狩猟儀礼の一端を示すものか

縄文の環状集落や環状列石などにもくりかえし出現する、円環のデザイン

石川県能都町の真脇遺跡／数百頭にのぼるイルカの骨が出土

数頭分の頭骨を口先をそろえて扇状に並べたり、二頭の頭骨を並列にしたりといった、意図的な配列が見られる

真脇の獣魚骨の集中する地点からは、長さが約二・五メートルの、上半部に浮き彫りを施した木柱が出土している

→彫刻柱とイルカの頭骨の人為的な配列の背後には、なんらかの儀礼が行なわれた可能性が認められる、「アイヌやシベリアの諸民族の間にひろく行なわれている動物の霊送りの場」(「縄文の狩猟儀礼」)に繋がるか

岩手県花泉町の貝鳥貝塚(縄文後期)／

イノシシの脳髓を取り出すために、前頭部がきれいに切断されているものや、眼のうしろあたりに皮を切った痕が残るもの

そうした皮の剥ぎ方は、アイヌのイオマンテ(熊送り)の場合と似ている

- ・「送り」から「供養」へ

「供養」は仏教的な思想を背景としている

習俗の底にアニミズム的な心性が横たわっている

けっして断絶したものではない

堂塔供養・鐘供養にはじまり、針供養・人形供養・茶筌供養から、鯨供養・鮭供養・鳥供養・虫供養、さらには近年流行のペット供養まで

山形県置賜地方に見られる草木供養塔

## (5)、山の信仰

柳田国男／山にはもうひとつの、古い日本が埋もれている

しかし、柳田は列島には、ふたつの山・ふたつの森があることを知らなかった

聖なる山

死者たちが還る他界

祖霊が籠もる山

お山参詣

＊

それにしても、縄文時代の墓地のある風景からは、縄文の人々があの世や他界の観念をすでに所有していたことが想像される。生者の空間と死者の空間とは、たしかに厳しく切断されてはいない。境界は曖昧模糊として見える。しかし、二つの空間が近接していることが、ただちに縄文人が他界観念を持たなかったことを意味するわけではない。死の穢れのタブーが両者に断絶を強いていない、というだけのことだ。下北半島のカグジ墓の背後に、たとえば恐山があり、「死んだらお山に還る」といった信仰習俗が見え隠れしていることを思えばいい。墓地とはいわば、日常のかたわらにあって眼に見える他界であり、さだかに眼には見えない、もうひとつの他界が山の奥に存在する、と信じられていた。民俗学では山中他界観と呼んでいる。いずれであれ、縄文人は生者の空間／死者の空間を一体のものとして認識しながら、やはり他界観念は持っていたはずである。

たとえば、秋田県の大湯環状列石に見られる、いわゆる「日時計」が外帯と内帯のあいだにあり、しかも西北の方位に位置を占めるのは、偶然ではあるまい。環状列石は縄文後期になって現われるが、共同墓地と想定されている。土坑の方位は東西軸と南北軸に大きく分かれ、東西軸に沿ったものが多く見られる。太陽の沈む方位を意識していた、という推論がなされている。東北や北海道の縄文晩期の遺跡では、死者の頭を西から北に向けて寝かせた発掘例が多いといわれるが、なんらかの関わりがあるのかもしれない。あるいは、この太陽の沈む方位には、あの世や他界が幻視されていたのだろうか。